

# 表現力をたかめる学習指導

——書くことを通して——

畑 実・鈴木洋一郎・佐藤クニ子・酒井 為久

## I ま え が き

### 1. 昨年度のあらまし

昨年度から中学校における研究の重点を表現力をたかめる学習指導におき、さし当っては特に書くことを通してそれを実践してゆくことにした。その手始めとして中学2年における作文指導を取上げた。年間5回にわたっての学習指導から、回数が多ければ多いほど作文力の向上に役立つことがいえたと同時に、いたずらに回数が多いだけでも効果が上らず、ポイントをきめた部分的な練習作文ないしは例文学習を加味した作文指導の必要性も痛感した。すなわち、回数は少くとも（実際問題として事後処理の問題等もあり回数はそう多くとることができないので）練習作文を加味した作文指導が効果があるのではないかと考えた。これらのことについては紀要第7集にくわしい。

### 2. 今年度のねらい

今年度は全学年にわたっての作文の学習指導を研究の対象に考えないことでもなかった。しかし作文の前段階に考えなければならない問題が多いので、後述するような方針をとることにした。

そもそも表現活動といっても、それは理解活動と密着して行なわれるものである。そういう観点から書くことにおける理解から表現活動への過程をみると、イ、教師の指導を理解して自主的に書く（国語帳の記録のしかた）

ロ、生徒の相互発表を理解してそれを書く（グループ学習等における事実の記録）生徒相互の発表を理解して感想を書く（グループ学習等における感想の記録）

ハ、自分の発表しようとする内容をまとめて書く（記録・説明・報告・感想・感動・意見などのいわゆる作文）

の各段階が考えられる。とにかく書くことの範囲はきわめて広く、書写や国語帳の記録のしかたから作文までを含む。書くことにおける表現力をたかめるという場合、普通作文力の向上を意味することと思うが、そ

こにいたる前段階の国語帳の記録のしかたや、グループ学習における記録のしかたも重要な問題である。にもかかわらずその方面の指導は不十分であるというのが現状である。そこで今年度の指導の重点を次のようにきめた。

1年：記録——国語帳の記録のしかた——

2年：記録——グループ学習の記録のしかた——

3年：作文——練習作文を加味して——

1年でとりあげる「国語帳の記録のしかた」というのは、メモ帳として国語帳に記録して書写する力と習慣を養うことである。家庭での学習、教室での学習の記録を正確な文字とわかりやすくしかも簡潔な文章で書く。そのためには、読んだことや聞いたことを理解して要点をつかみまとめなければならない。1年生においては、書くことの体系の中で最も基礎的な、表現以前の段階をとりあげ、効果的な指導の方法を考えてみたいと思う。

2年の「グループ学習の記録のしかた」の指導についてすこしふれたい。ことばによる表現活動は通常音声と文字とによってなされる。そして何か話そうとするときも、また書こうとするときも中心内容があり、聴者や読者はこの主題を理解することにより会話もでき感想文を書き、また要点を失わずにその記録をとることができるのである。従って聴者や読者にその意図を十分に理解させるためには、この主題を整理しその発表の方法や順序（主題（素材）、構想、叙述）に注意しなければならない。「グループ学習の記録のしかた」は、3年が自分の発表しようとする内容をまとめて書くという作文学習への発展過程として、また1年が教師の指導してゆくことを理解して自主的に書きまとめるという「国語帳の記録のしかた」と関連をもたせながら、次のような点を考慮して指導するように試みた。すなわち、前にもすこしふれたように生徒相互の発表を理解してそれを書く事実の記録と、その発表に対する感想を書かせる感想の記録である。前者は事実の理解にもとづく客観的記録であるのに対し、後者は個人の自由な感想発表を生かす主観的な記録といえよう。この二つの記録を並行させながら指導してみた。

表現力をたかめる学習指導

3年では1年2年から発展して自分で文章や詩歌を創作する表現活動を取りあげ、本研究の表現力をたかめるという最終目標を達成しようとするものである。そのためにもすこしふれたように、練習作文を加味してよりいっそうの効果をあげようとするものである。

3. 書くことの実態

今年度の初めに今後の指導にも役立たせるために生徒の中で書くことがどのように行なわれているか、また考えられているかということを中心に実態調査を試みた。その結果は次のようであった。これらの結果を

今後の指導に生かしてゆくことにした。

		1年 89人	2年 95人	3年 95人	
1. 国語の好き嫌い	イ, 好き	7	2	6	
	ロ, やや好き	37	26	32	
	ハ, 普通	29	36	35	
	ニ, やや嫌い ホ, 嫌い	11 5	25 6	19 3	
2. 国語分野の興味順位	イ, 読む	1位	33	43	33
		2 "	39	29	41
		3 "	15	20	15
		4 "	2	3	6
	ロ, 書く	1 "	8	4	9
		2 "	12	16	12
		3 "	38	16	32
		4 "	31	49	42
	ハ, 話す	1 "	8	9	7
		2 "	13	20	14
		3 "	20	32	35
		4 "	48	34	39
ニ, 聞く	1 "	40	38	44	
	2 "	25	32	29	
	3 "	15	28	16	
	4 "	8	7	6	
3. 書取りの得意さ	イ, 得意	4	14	6	
	ロ, やや得意	29	22	15	
	ハ, 普通	40	37	30	
	ニ, やや不得意 ホ, 不得意	11 5	8 14	23 21	
4. 習字の好き嫌い	イ, 好き	12	12	20	
	ロ, やや好き	18	19	9	
	ハ, 普通	21	30	31	
	ニ, やや嫌い ホ, 嫌い	18 20	14 20	6 29	
5. 国語帳の書き方	イ, 予習したと自分の考えと比較して書く	2	4	15	
	ロ, 先生の話の要点をまとめて書く	30	34	31	
	ハ, 板書はしっかり写す	52	49	34	
	ニ, 時々板書を写す ホ, 何も書かない	5 0	8 0	13 2	
6. 日記	イ, 毎日つける	2	5	11	
	ロ, 時々つける	22	31	38	
	ハ, つけない	65	59	46	
7. 文集	イ, 自分で作っている	2	13	10	
	ロ, 作っていない	87	82	85	
8. 手紙を出した回数	イ, 4以下	57	34	47	
	ロ, 5~9	20	23	29	
	ハ, 10~14	8	15	16	
	ニ, 15~19	2	11	1	
	ホ, 20~24 ヘ, 25以上	1 1	8 4	1 1	
9. 手紙の書き方	イ, 思うようにすらすら書ける	12	18	19	
	ロ, 思ったことを何とか書ける	51	56	49	
	ハ, 何度も書きなおす	18	7	12	
	ニ, うまく書けない ホ, 書けないのでやめる	8 0	10 4	12 2	
10. 作文の好き嫌いとその理由	イ, 好き	5	11	7	
	ロ, やや好き	12	15	16	
	ハ, 普通	27	38	34	
	ニ, やや嫌い	32	17	16	
	ホ, 嫌い	13	13	26	
11. 書きやすい文	イ, 描写する文	37	44	35	
	ロ, 説明する文	22	23	19	
	ハ, 議論, 説得する文	9	8	13	
	ニ, 物語る文	10	15	15	
	ホ, 感動を表わす文	11	6	13	

- 好きな者はほとんどが女子であり、嫌いな生徒の大部分は男子である。
- 聞くこと、読むことに比べて、話すこと書くことをいやがることは非常なものである。
- 一般によくやっているとみてよいが、上級になるにつれて不得意者がふえている。
- 好き嫌いの度合いはそうかたよっていない。
- 一般によく書いているとみてよいが、自主的な態度の者が少ない。
- 低調とはいえ上級になるにつれふえている。
- 少ないとはいえ上級でやや多くなっている。
- 動機があるからかまあま書いている。
- 必要度からかなんとか書ける。
- 一般に嫌いな生徒が多い。
- 描写したり説明する文のように日常生活に関係があり、即物的具体的な題材のものが書きやすい。それに比べて議論したり説得するような抽象的な、形式をととのえるようなもの、または韻文のようなリズムを主とするものは書きにくい。
- \*〔作文の好きな理由〕○書いているとなんとなく楽しくなるし、特に思い出を書くのが好きだ。○考えていることを文章に書くと自分の考えがはっきりつかめるしまた深くなる。○自分の生活や行動の悪い点がわかってくるので反省することができる。——これらは書くことが単に楽しいというだけでなく、自分の考えや生活と結びつけて積極的な態度で作文の意義を考えている。

〔作文の嫌いな理由〕

- はっきりした理由がないが興味がない。
- 書くことがめんどうだ。
- 作文を書くときいい材料がない。
- 書こうと思うものがない。

- 書こうと思うものがない。
- ある一つのことがはっきり頭に浮かんでこない。
- これらは生活の態度にも問題があるようだ。
- ことばのつかいかたがむずかしい。
- 文がうまくつなげないので長い文章を書くのは手がた。
- 題に適した一番はじめのことばがなかなかみつからない。
- 思っていることがうまく書けない。
- これらは表現技術に問題があると思われる。

## Ⅱ 指導の実際

### 1. 1 年：記録

—国語帳の記録のしかた—

#### (1) 指導経過

##### イ、実態調査

効果的な指導の手がかりを見つけるため、生徒は実際に、国語のノートブックをどのように使用しているかを知らなければならない。

これまでも機会あるごとにノート（以下ノートブックをノートと省略する）を提出させて点検したり、授業中に巡回指導もしてきたが、具体的に基準を設けて評価し、統計をとって見たことはなかったの、客観的な資料を得るためにやってみた。評価の基準については問題もあろうかと思われるが、次のようにA B C Dの4段階に分けて行なった。

	内 容	表記・形式	態 度	比率
A	家庭や教室における学習の記録が、正確に、無駄なく書いてある。教室の学習記録については、板書以外の補足的な説明もメモしてある。	漢字、仮名づかい、送り仮名の書き方が正確で、利用的なくふうがしてある。	自主的な態度でノートを取っている。	12% (11名)
B	家庭の学習記録はよいが、教室の学習記録は、板書を写しているだけである。	表記は大体正確であるが、形式のくふうがない。	自主的な態度に欠けている。	52% (47名)
C	家庭の学習記録が時々ある。教室の学習記録は、板書を写しているだけである。	漢字、送り仮名の誤りが時々見受けられる。	文字の書き方が乱雑である。	26% (23名)
D	家庭の学習記録が殆んどない。板書の写し方が不正確である。	誤字多く、縦書き、横書きが不統一である。	落書きがあり、汚損が目立つ。	9% (8名)

#### ロ、調査後の感想

##### ① 理解して書いていない

板書をそのまま写しているのが非常に多く、大部分の生徒は板書を写すことに終わっている。補足的な説明の要点をメモし、考えながら必要事項を判断して書いている生徒が12%しかいないということ、これは今後の指導の中心として、もっとも力を入れなければならない。また、予習と教室の学習を照らし合わせて訂正したり補正したりしている生徒は、全体の中で、わずか2、3名に過ぎない。家庭学習の内容は、殆んど単語の意味調べで、しかも辞書のことばをそのまま写している。文脈に即した意味を考えたり、理解して自分のことばで書いている者は非常に少ない。

##### ② 男子と女子の違い

一般に女子の方が、ノートの使い方はよい。文字が正確丁寧であり、色鉛筆を適当に使って図式化するなど、形式の美しさを考えている。しかし、そのような形式面に力を集中して、思考の伴わない書き方をしている。一方男子の方は、書くのが面倒であるといった傾向が強く、文字の書き方も不正確、乱雑な者が多い。

##### ③ 成績との相関

成績の優秀な生徒は殆んど例外なくAの段階であるが、男子に1名だけ例外の生徒がいた。理解が速く、授業中の発言も活発であるが、ノートは忠実にとっていない。こうした状態に甘んじていることをきびしく反省させ、着実にノートするような方向に指導していかなければならない。

##### ④ ダブルノートの使用

家庭の学習記録と、教室の学習記録を2冊のノートに分けて書いている。また、雑記帳に書いたものを、きれいに書きなおすといったもので、あまり意味はないと思われるので、やめるように指導した。

#### ハ、具体的な指導

実態調査の結果、ノートの大部分が板書や辞書をそのまま写していたことから、「理解して、自分のことばで書くこと」を強調して、ノート指導に当たった。書くべきことを自分で判断して、必要事項はもらさずメモをするといった、自主的な態度をどのようにして、身につけるか。これまでに試みたことを述べてみる。

##### ① 板書は手がかりになることばだけ書く

学習の過程で教師が板書する場合、書くべき事項の見出しは板書するが、その内容を理解してまとめたり、どんな方法で書くかは各自にまかせる。これは板書をそのまま写せばよいという安易な態度を改めさせるためばかりでなく、個性を生かしたノートの取り方を身につけるためにも必要と思われる。

具体的には生徒が書くべきところは点線や（ ）で示すのである。例えば教科書の中の教材、「おい立ちの記」（アンデルセンの伝記）の学習で、アンデルセンの性格をノートする場合、□の中の見出しだけ板書して点線以下は生徒が、理解したことを整理してノートする。ここに生徒のノートしたものを例にあげてみると、

アンデルセンの性格 ……………	
	風変わり一男の子なのに人形の着物を縫う。
	信心深い一後にこの信仰によって、どんな苦しみにも打ち勝つことができた。
詩人の素質 ←	—空想的—すぐりの木の下に坐って、木の成長していく様子を見ている。
	—孤独—ほかの少年と遊ばない。

- ② 文章の朗読を聞きながらメモを取る  
朗読を聞きながら、それを理解して要点をメモし、内容をまとめる。この練習を適当な教材があるごとにやってみた。これまでにやった教材は  
「かけがえのない人間」（論説文）  
「私たちはどんな文学作品を読んでいるか」（調査の報告文）

その他、「校内放送を聞こう」という単元を生かして、伝達や報告の事項を聞いて、メモをとり、掲示板の書き方の練習もした。

- ③ その他  
授業中に書く機会をできるだけ多くする。口頭で発表する場合でも、まず書いてからにする。例えば、小説の読後感想や主題、説明文や論説文の要旨など。

それから、時には全然板書せず、話し合いの後で各自が必要なことを書いてみる。小説の主人公の心理の動きを話し合ってから、その展開を書いてみるなど。

また、語句の断片を羅列するのではなく、わかりやすく、簡潔な文の形で書く習慣をつけるように留意した。

ノートの点検は、大体単元の終わりごとにする。そしてよいノートをを例に出して、ノートの取り方を話し合い、関心を持たせることも折にふれてやってみた。

## (2) ま と め

一学期の終わりに実態調査をして、計画的な指導をはじめてからまだ時日も浅く、指導の効果をはっきり実感として持つまでには至らない。しかし二学期の終わりに再び実態調査をした結果を見ると、わずかながら効果は上がっている。調査の結果を表にしてみると次のようになっている。1回目と同じ方法でA B C D

に分けて評価した。

	A	B	C	D
1回目	12%(11名)	52%(47名)	26%(23名)	9%(8名)
2回目	20%(18名)	48%(43名)	30%(26名)	2%(2名)

指導前と指導後を比較して、考えられることはノートの使い方が一般に慎重になってきたことで、落書きしたり、ページを飛ばして書く者が非常に少なくなった。そしてノートを取ることに関心を持ち、くふうして書く傾向が目立ってきた。しかし、一方においては相変わらず板書を写すだけに終わっている生徒が多く、聞きながらメモを取る場合は、耳にはいることばを機械的に羅列しているに過ぎない。

また教室における学習態度がよくなってきた。話しをよく聞き、注意力を集中して授業を受ける態度が全体として見られる。家庭の学習もよくするようになってきた。しかしこれらのことを、ただちに生徒の学習意欲の高まりと結びつけるのは早計で、ひとつにはノートの点検を前提としていることに教師は反省し、生徒の身についた習慣にもっていくまで、根気よく継続的な指導を続けていかなければならない。

## 2. 2 年：記 録

——グループ発表の記録のしかた——

「記録のとり方」の指導は次の3段階に分けて行なった。最初は生徒に一定の記録の形式を与えて、主として事実を書くようにし、次には事実と意見（感想）とを区別しながら記録してゆくようにし、更に生徒相互の学習記録をとり、また学習記録を形式などを考えながら作ってみるようにした。すなわち次のような教材によって指導した。

- イ、クラス会議の議事録のとり方
- ロ、読書感想文を書く
- ハ、読書感想発表の記録のとり方
- ニ、学習活動の記録のとり方
- ホ、学習活動の記録を書く

### (1) クラス会議の議事録のとり方

単元「会議の運び方」の指導の一つとして事実を順序よく正確に記録することに目標をおいた。予めクラスの生活中で関心事項や行事などに関係のある具体的な問題を提出させ、その中から適当なものを選んだ。そして希望によってグループの所属をきめ、選出した役員が会議の運び方について十分に打合わせをし、また記録用紙（プリント刷り）を生徒に二枚あて配布しておき、他のグループの会議の運営を記録するようにした。

○8グループが交代して会議を進めたのであるが、提案の説明、司会や討論のしかたについても指導した。

○〔表Ⅰ〕のような形式に従って、各人は書記の立場で、二つのグループの行なう模擬クラス会の議事録をとらせる。この形式はだいたい教科書所載の例により、書くときは正確で順序正しくという態度を養うようにした。また会議の進め方の巧拙についても互に評点をつけた。

(2) 読書感想文を書く

夏休の宿題として、自由に良書を選択してその読書感想文を書かせ、クラス毎にすぐれた作文三編を選んで校内の読書感想文コンクールへ提出した。作文にあたっては作品の筋の紹介でなく自己独特の感想を中心にまとめてるように指導した。

(3) 読書感想発表の記録のとり方

夏休の読書後の感想発表を聞きながら、その発表内容や自己の感想を整理して記録するのであるが、グループ活動による読書会の方法をとり、その感想発表者は作品の筋をプリントにして全員に承知させるようにした。

○グループに分けて六回の読書会をした。感想発表を聞きながら、司会者を中心にして質問しあう。話し方の指導として会の進行を録音し授業後再生して聞かせ自分の発表や質問のしかたを反省させた。

○〔表Ⅱ〕のような項目の順序で読書会の内容の記録を全員にとらせ、よいグループの読書会を挙げて互に評点やその感想を書かせた。

(4) 学習活動の記録のとり方

短歌・俳句鑑賞の単元を学習するのに6グループに分け、それぞれのテーマをもって調査したことや指導をうけたことを順序よく記録するのであるが、短歌、俳句の学習に必要な資料の蒐集とその処理のしかたを指導し、これらの短詩型への興味から古典の世界の一端に触れ、進んで短歌・俳句を作るようにした。

○古典短歌・俳句をそれぞれ1グループ、現代作品をそれぞれ2グループに分けて6グループの学習活動をすすめる。教科書中の作者の他の短歌・俳句を調べてその鑑賞を発表させるが、文学史的な知識をつけるために古典では万葉・古今や芭蕉・蕪村・一茶のわかりやすい作品をも味わうようにした。図書館利用のグループ学習であるので巡回指導ができた。また遠足の行事を通して短歌あるいは俳句を提出させた。

○〔表Ⅲ〕のような内容をもつ学習記録を毎時グループの記録者(交代して書く)が提出し、これら

4時間の活動後の鑑賞発表に対してはそれぞれの成績を評価しあう。〔表Ⅳ〕

(5) 学習活動の記録を書く

数回「記録のとり方」について指導した後で、グループ活動の場を自由に想定させ、その記録を書かせた。〔表Ⅴ〕そしてこの記録の指導に当っては、内容上からは必要事項を順序よく書いているかどうか、形式上から正しい表記をしているか、また自分の感想なども書けているかなどに着眼した。

以上だいたいグループ活動を主としてその記録をまとめさせて来たが、生徒相互の活動を通してひろく人間関係を養うように努力させ学習興味を助長し自主的に記録がとれるようになり、更に作文を進んでする態度をつくるのが目的であった。そして終りに次のような項目について調査した。〔表Ⅵ〕それによると生徒の大部分は発表にあたりメモを用いて要点だけ書くことにしており、発表要点のまとめ方やまた簡単な文にしておくのがむずかしく、また他人の発表を聞き記録をとるときは、事実と意見(または感想)とを区別して書いたり、その要点を記録することであるが、形式を考えて順序よくまとめることには困難を感じていることがわかる。正確に字を書いてゆく態度は養われつつあるが、速く書く点には指導の余地のあることが痛感された。

〔表Ⅰ〕 第 回クラス会議議事録

1. 日時・場所
2. 出席者 名(男子 名, 女子 名)
3. 役員 議長, 副議長, 書記
4. 議題, 提案者名
5. 会議の進行  
議題の提案理由, 討論の内容
6. 感想  
役員・参加者の活動や傍聴者(参加しない他グループ)の関心や特別質問などについての感想を書く

〔表Ⅱ〕 読書感想発表の記録

1. 記録の対象となったグループ(2つ)
  - イ, 名まえ
  - ロ, 発表した作品
  - ハ, 司会者と感想発表者
2. 発表した作品について
  - イ, 作品選定の良否
  - ロ, 作品の内容 興味と価値の有無
3. 感想発表のしかた
  - イ, 話しかた

表現力をたかめる学習指導

- ロ、内容のまとめかた
- 4. 感想または評価
  - イ、グループ内で発表者に対する協力
  - ロ、司会のしかたとグループのまとめ

〔表Ⅲ〕 学習活動の記録

1. 月日、曜日、時限
2. グループ
3. 学習活動
  - イ、活動前の打合せ 毎時5分リーダー中心で
  - ロ、活動の実際と次時間の予定
4. 感想その他
  - イ、毎時の活動に対してリーダー、またグループ員の感想
  - ロ、その他調査して特にわかったこと、また先生に質問したこと

〔表Ⅳ〕 短歌、俳句のグループ発表について

1. 自分のグループ活動を反省して
  - イ、まとめ
  - ロ、各人の仕事のバランス
  - ハ、調査事項の理解と難易
  - ニ、実際学習したものの記録
2. 他のグループの発表に対して
  - イ、リーダーのよかった班
  - ロ、発表内容のまとめ
  - ハ、話し方
  - ニ、発表資料（プリント）について
3. 今後のグループ活動に対する感想  
(グループ活動の長短を記入させる)

〔表Ⅴ〕 記録文

今まで学習した記録（クラス会議・読書感想発表・短歌俳句のグループ発表）の中から一つ書きやすいものを選び、どのようにまとめてみたかを思い出して書いてみなさい。また以上の三つの状況を自由に想像して独自のものを書いてよい。  
(時間 20分)

〔表Ⅵ〕 「記録のとり方」についての調査

1. 感想や意見の発表にはどうするか
  - イ、何か見ながら発表する
  - ロ、何も見ないで発表できる
2. 何か見ながら発表するものは次のどれか。
  - イ、全部見ながらする
  - ロ、大意ぐらいまとめておく
  - ハ、要点のメモでよい

3. 発表のとき用いる「記録」について
  - イ、内容をうまくまとめて書けるか
  - ロ、話しやすい記録にすることができるか

3の問以下の調査には、よく書ける。だいたい書ける。なかなか書けない。書けない。の四段階に分ける。
4. 発表を聞いて記録をとるときに
  - イ、事実と意見の区別を考えて書けるか
  - ロ、要旨のメモはとれるか
  - ハ、記録する目的に応じてその順序を考えて書けるか
5. 記録のとり方においては次のどれか
  - イ、正確に書けるか
  - ロ、早く字は書けるか

〔調査の結果〕

項目	区分				
	イ		ロ		
1	90		5		
2	イ	ロ	ハ		
	7	50	33		
3	イ	上上	大体	困難	不能
		3	51	25	1
4	ロ	2	47	36	5
	イ	7	53	23	2
5	ロ	7	57	29	2
	ハ	2	28	54	11
5	イ	9	70	13	3
	ロ	14	44	30	7

3. 3年：作文

——練習作文を加味して——

(1) 1学期間の作文を通して

テキストや時間の関係から練習作文を取り入れたのは2学期になってからである。1学期中に書かせた作文は、4月：三年生になって、5月上旬：意見・感想、5月中旬：修学旅行、8月：読書感想の4回である。そのうち「三年生になって」と「意見・感想」は教科書にある単元であり、「修学旅行」「読書感想」は学校行事に即したものである。読書感想文は全校的なコンクール形式で9月に表彰することになっていた。個々の指導については省略するが、それらの作文を通してみられる欠点をおおまかにあげてみる。

イ、主題なり要旨なりが不明瞭である。(何をいい

たいのかはっきりしないのがかなりある。

ロ、叙述の面からみていくと、まず長い文章が書けないものが圧倒的に多い。つぎつぎと書き続けていけないのである。ぽつんと切れたり、すぐ終わってしまうものが多い。また、一つ一つの文をとってみても観念的なものが多く、生き生きとした具体的な即物的なものにかける。また書き出しがへたで、紋切り型だったり平凡である。それがために文がうまくつなげていけない場合もずいぶんある。誤字がきわめて多く、敬体常体の乱れもある。

ハ、構想がたってなかったり、まずかったりする。思いつきや、その場あたりの書きなぐりもある。これが上述のイ、ロ、にも関係しているものと思われる。

以上の欠点を救う一方途として練習作文が意味をもつものと考え、2学期からそれを実施することにした。上述の欠点の中でもとくに叙述の面が劣ると思われたので、さしあたってはその方面から始めることにした。本原稿の締切りまでにはそれしかできなかった。

## (2)練習作文を加味した作文

### イ、目標をきめて

秋季遠足の文章を書かせることを目標にしてそれに合わせた練習作文を実施することにした。しかもこの場合はさきにふれたように叙述の面に重点をおいた。例文をつかって文を書き継ぐ練習、描写したり説明したりする練習、書き出しの練習をしておいて、秋季遠足の文章を書かせることにした。

### ロ、練習作文

時間は読解の余った十数分間とか、別に1時間をとったりして次にあげるような例文をつかって種々の練習をした。じゅうぶん時間を与えたり、時間を区切ったりして場面に即応させた。次に練習した例文の一部をあげよう。これは筑摩書房の「中学作文」（代表著作者大村浜氏）から適当なものをとりプリントして練習させたものである。テキストとして全生徒に持たせようとも思ったが購入時期もおそかったし、100円という代価は使用回数割に負担が重すぎると考えたからである。

### 〔練習例文の例〕

#### 1. 書き継ぐ練習

- (1) 主語文節によって文を書き続けること（次の主語文節によって文を書き継いで完成してみよう。）——（修節をつけて長く書くよう指示した。）

○きのうから学校が ○「どうした」とかれが ○汽車と電車が

- (2) 述語文節によって文を書くこと（次の述語文節によって文を完成してみよう。）

○…いたそうである。○…感じさせる。○…失敗したにちがいない。

ない。

- (3) 書き出し文によって第二の文を書き継ぐこと（次の書き出し文に続けて第二の文を書き継いでみよう。）

○テレビが普及するにつれて、ある科目の標準が低下しているという話がある。○「電報・電報」と戸をたたく音。○どの学校にもいろいろなクラブ活動があります。

- (4) ある文に続きことばや「こそあど」によって文を書き継ぐこと（次の文章に続けて続きことばや「こそあど」をつかつてあとの文を書きついでみよう。）

○交通事故の犠牲は子どもがいちばん多い。横町からマリがころがつてくれば、そのあとから子どもが飛び出してくるものと思え。

- (5) いろいろな二つの文をつないで一つの文にすること（次の二つの文を一つの文にして書いてみよう。たゞし、「が」でつながないこと。）

a わたしは、小さいころ千葉の海辺に住んでいたことがあります。

b 住んでいた千葉の家は、海に近くて、海まで三、四分という所です。

## 2. 述べ方の練習

### A 描写する

- (1) 人物や事物・場所を取りあげて、形・様子・色・音・におい・感じを書くこと

○となりにはどんな友だちがいるか ○国語の教科書はどんな表紙か

- (2) 人物や事物・場所の形・様子、色、音、におい、感じを思い出して書くこと

○あなたの家の前はどんなところか。

### B 説明する

○学校の一日の生活を書け

## 3. 書き出し

- (1) 書こうとしていることがらについて、端的に書きはじめること。

- (2) あるできごとを情景、会話から書き始めること（次の文章を情景から、また会話から書き始めてみよう。）

○兄たちと沼津の戸田キャンプに行つた。ところが、あいにく台風6号が来て、せつかく張つたテントをたたむやら、茶店へ逃げこむやらした。ずいぶん前からのプランだつたので、雨に降りこめられてがっかりしてしまつた。

- (3) 書こうとしていることの中心的な人物、印象的な一端から書き始めること

上にあげたような例文で作文させ、数名に読みあげさせて簡単に批評し次の例文に進むという方法をとった。

### ハ、秋季遠足の作文

①これはいってみれば描写する文でもあり、また説明する文でもある。さきに練習した述べ方や書き出しや書き継ぎ方がいかに反映されているかを期待した。主題の出し方、構想のたて方等は今後練習することにし、今回は直接その場でじゅうぶん考えさせてからペンをとらせた。そのためにいきなり原稿用紙に書かせるのではなく、「作文のための手引」といったものをプリントしてもたせ想を練ってから原稿用紙に向かわせる。最後にはこの手引もいっしょに提出させた。これはあとの処理にも役立つ。これも大村浜氏のやり方を参考にした。（河出書房、作文講座）



\* (練習作文の効果) (男女を通じ)

- うまくすらすらと書けるようになった 21
- 文のつづきぐあいがうまくいく 15
- 構成がはやくたつ 9
- 作文力がつく 8
- 文章が長くかける 5
- 書き出しのコツがよくわかった 5
- その他

この調査から生徒にとっては興味をもって学習され(最初の実態調査より好きになった生徒が多くなっており)しかもある程度効果をあげているとみてよい。

③従前の作文との比較

作文の評価はむずかしく、いろいろ論議のあるところであろうと思うが、私は前述したように便宜上、主題、構想、叙述の三項目と全体とについてABCの三段階に評価している。そこで4月以来の作文の評価を一覧表に示すと次のようになる。

題 材 \ 評 価	A	B	C
三年になって	17人	49	29
修学旅行	16	46	33
意見・感想	22	42	31
読書感想	20	45	30
秋季遠足	27	49	19

各回は異質のものだけに早急に比較はできない。しかし修学旅行と秋季遠足は比較的似ているので、この二つの間には効果があったといえるのではないか。又全体として練習作文を加えた後では効果があったといえるのではないか。生徒の作文を読んでわかったことは次のようである。主題を明確に出すようになったものが多くなり、構想もしっかりしてきたし、一番の欠点であった叙述のまずさもすらすらと文をつづけるうまさに上昇してきた者がふえた。

Ⅲ 今後の見通し

昨年度本年度を通じて書くことの全貌がつかめたように思う。来年度は各学年とも作文を主とした指導に重点をおきたい。それは指導要領に示された各学年の指導事項、活動事項に応じた年間計画を立案することである。その中に練習作文を適宜加えてよりいっそうの効果을あげようと思っている。